

いけんひろば
「こどもデータ連携」について考えてみよう！
いけんのまとめ

1. 10/30 開催回	2
1班（大学生世代4名）	2
2班（大学生世代4名）	5
3班（大学生世代3名）	9
参加者アンケートで貰った意見	11
2. 11/6 開催回	12
1班（大学生世代5名）	12
3. 12/6 開催回	18
1班（高校生世代3名）	18

1. 10/30 開催回

1 班（大学生世代 4 名）

1. お住まいの自治体が既に保有するデータを活用して、こままっている子どもや家庭を早期に把握して、プッシュ型・アウトリーチ型の支援を届ける「子どもデータ連携」の取組について、率直にどんな感想を持ちましたか？

- 子どもデータ連携については、ゼミの 4 年生の先輩で研究していた人がいたため少し知っていた。横須賀市で行われている支援の事例だった。
- ゼミの 4 年生の発表を聞くまでは子どもデータ連携について聞いたことがなかった。アウトリーチ型という言葉だけは聞いたことがあった。子どもデータ連携とは、支援を必要としている人が自ら支援を求めるのを待つのではなく、自治体などから「困っていないですか」と声をかけることだと理解している。プッシュ型は主に SNS のことを指していると聞いたことがある。
- 支援が必要な人でも、自分からはなかなか声をあげられない人、どこに相談していいかわからない人にとっては、支援提供側からアプローチしてくれると支援に繋がりがやすく、気持ち的にも負担にならない。一方、言い方は様々だと思うが、全然知らない人から「あなたには支援が必要です」と言われると嫌に思う人もいられるかもしれない。赤の他人からアプローチされると、少し壁を作ってしまう可能性もある。
- 支援提供側が、本人がよく会うくらいの間柄の親戚に「家族の方にこういう支援が必要です」と伝え、その人から本人に伝えてもらえれば、納得してもらえるのではないかと感じる。血縁関係のある人や友人から本人に伝えてもらうイメージである。もし自分なら、同様の状況を支援したことがある自分の友人から教えてもらえるとありがたいと思う。
- こどもの立場で意見を言うと、困っていることに対しては親がなんとかしなきゃいけないと感じる。外部から親に働きかけて、状況が良くなるのであればいいと思う。
- 取組自体はいいと思うが、都市部と地方で差が出そうなので、現実的には難しそうだと感じる。都市部の場合はこどもの数が多いため、データの数も多くなるのがデメリットである。一方、交通機関が発展しているのでワーカーが訪問しやすい。地方だと、こどもが少ない分データが膨大な量にならずに整理しながら利用できそうである。一方、訪問がしにくくなりそうだと感じる。データが多すぎると、それを整理して適切な支援につなげられるかどうかワーカー次第になってしまう点が難しいと考えている。ワーカーは、支援が必要な人にアクセスする役割の市役所の福祉課にいる人のこと。ワーカーの実力がなければ、データを利用した適切な支援につなげられない。
- 自分は、データの連携とは機械に登録されているデータとデータを組み合わせてコンピュータが判断するというイメージだった。この人はリスクが高い、この人はリスクがそこまで高くない、ということが機械的にわかり、人が判断しないということだと思っていた。

- データ連携によって職員の業務への負担が軽くなると、より効率的に働けるようになると思う。例えばいま、児童相談所は1人の職員がいろいろな家庭の膨大なケースを抱え、何十人という家庭の問題を解決しないといけないため、残業も多い。「支援をしないとけない」という情報がピックアップされれば、その対象者の支援に優先して取り組むことができるため、問題解決に繋がって仕事が減るのではないかと考える。
- 学校でアンケートを実施する場合、同じ人の回答でも読み手によって感じることは異なるだろう。そのため、より多くの人に見てもらおうと膨大な量の意見がでる。支援の要否の判断のはざまにいる方については、判断に困ってしまう気がする。担任の先生だけが「この人は大丈夫」と判断して支援を行わないとなると、判断材料が担任の先生の主観だけになってしまう。担任の先生関係なく、対象者が住む地域の人にまで話を聞いていくことで、本当に支援が不要なのかが見えてくると思う。
- 支援が必要であることは身近な人からだと逆に言いづらいため、データ連携で訪問してくれるような人（赤の他人のような人）の方が言いやすいかもしれない。

2. 実際に困難な状況に陥った際に、自分なら誰（どこ）に助けを求めますか？ 選択肢として誰（どこ）が浮かびますか？

- 自分と同じ困難な状況になった人に会いたい。社会福祉協議会に行けば該当者を教えてくれると思う。
- 具体的な支援内容はわからないが「助けてほしい」と思っている人は、どこに相談したらいいかわからない場合も多いと思う。自分ならインターネットで一度調べてみる。いろいろな情報があると思うので、とりあえず役所に行けば、どこに繋がればいいのか教えてくれると思う。
- 自分も同じことをする。インターネットで調べて、インターネットで出てきた電話番号にかけて相談する。
- 自分が小中学生だったら児童相談所、保健室の先生、担任の先生、放課後学童クラブに通う場合には学童クラブの先生が選択肢に挙げられる。実際に助けを求める場合は、保健室の先生に相談する。
- 自分が子どもなら、身近な存在は親であると思う。家族に関する問題など家族に言えない場合には学校の先生に相談する。悩みを打ち明けるという意味では友達に話すと思う。
- 中学・高校生くらいで親から虐待を受けていて、自分から児童相談所か警察に電話をしたというケースを聞いたことがある。
- こどもが虐待を受けているケースだと、学校や保育園にも行かせてもらえていない場合がある。虐待していることが外にばれるのが嫌で、こどもを外に出さなかったり外からの目を入れないように閉じ込めていたりする親の場合、こどもが電話を使わず外に助けを求められないことがある。そのような場合にはどうすればよいか疑問に思った。小学生以上の場合、本当はどの学校に在籍しているはずであるかがデータでわかると思われるため、プッシュ型とアウトリーチ型で支援に繋がることができるのではないかと。ただし幼い子どもだと、健診や生活保護の受給状況などから危険だということがわかることもあるが、実際に危険な状況であることに周囲が気づくことは難しいだろうと思った。

3. 自分から助けを求められない、求めない場合に、周囲からどのように接してほしいと感じますか？

- 無料で食事を提供する「0円食堂」などは、本当は困っている子どもがとりあえず食べに来てくれればいいものだと思うけれど、対象を困っている子どもに絞らずに子ども全体や高齢者も来て OK としている。年齢制限や貧困家庭に限定すると、「そこに行くことで自分が貧困家庭だということになってしまう」と当事者が感じ、来るのを躊躇してしまう。みんなが来られるようにし、楽しめる場所を作ることで、そこが自分の居場所になったりする。誰にも助けを求められなくなった場合に、家以外にも自分の居場所があるといいなと思った。
- 自分は、貧困の子どもたちを支援したいと思って自分の地域で居場所ボランティアをしている。最初立ち上げるとき、自分の中では貧困の子どもたちが来てほしいという考えしかもっていなかったが、『『貧困の子どもたちだけ来て』と言ったら誰も来ないよ』ということ指摘された。誰でも来ていい場所にすれば、貧困の人もそうでない人も気軽に来ることができるようになる。実際に、ヤングケアラーの子が来てくれた。後々自分が抱えている事情を話してくれるような環境にまで持っていけたのがよかった。聞かれるのが嫌な人はいると思うし、自分も同じ立場だったら聞かれたくない。紛れられるような環境がいいなと思う。
- 何かを気にして言えない、相談できる人が見つからない、という場合には、学校の先生に「最近元気？」と気にかけてもらえるだけでも安心感を得られる。何度かためらっても、いつか言いたいと思えるかもしれない。ただし、嫌いな先生だったら嫌だとも思う。

以上

2 班（大学生世代 4 名）

1. お住まいの自治体が既に保有するデータを活用して、こまっている子どもや家庭を早期に把握して、プッシュ型・アウトリーチ型の支援を届ける「こどもデータ連携」の取組について、率直にどんな感想を持ちましたか？

- 以前、自分たちならどのようなデータを連携させて困っている児童を発見するか話し合った。実際に、どのようなデータを連携させようとしているのかについて知りたい。
- そもそも児童虐待や困っている子どもや家庭がなくなるのが理想であることを踏まえると、プッシュ型・アウトリーチ型の予防的な支援を実施できるのは良いことだと思う。
- あらかじめリスクが高い家庭を把握し、アウトリーチ型の支援を実施することで、困っている人を助けられる可能性が高くなると思うため、良い取組だと思う。
- 難しい取組だと思う。福祉の実習に行った人の話を聞くと、虐待通告があった家庭に訪問しても、親に「虐待していない」と主張され支援を拒否されることがあるようだった。また、ヤングケアラーの場合、当事者である子ども自身が「困っていない」と言うこともある。周囲の人間からすれば、家事などに追われて遊んだり勉強したりする時間が確保できていないのは学生本来の姿ではないように見えたとしても、当事者が「家族の支援をして何が悪いのか」と思っている限り、支援するのは難しいのではないかと感じた。
- アウトリーチ型支援という形で家庭に介入したとき、親の権利はどのように扱われるのか疑問に思った。親は子どもに対して大きな権限を持っている以上、行政の家庭への介入が必要となる場合がある。一方、親の権利も尊重する必要がある。どのように親と子どもの権利を両立していくのか考えていかなければならないと思う。
- データ連携の取組の目的は、リスクの高い家庭を抽出することであり、リスクを確認次第直ちに保護などの措置をとるわけではないと理解していた。そのため、ケースワーカーなど支援に関わる人のとらえ方によっては、親と子どもの権利は両立させられるのかと思った。
- 取組が実現できたらとても良いと思うが、データありきになる危険性もあると思った。分かりやすさという観点では、リスクを数値という目に見えるもので表現するのは良いことだが、データにとらわれて数値には表れないリスクを見逃してしまうおそれがあると思う。
- 支援の必要性をどのように判定していくのが気になる。「福祉はケースバイケース」といわれるように、一見してリスクが高いように見えても実際にはリスクがない場合や、逆に一見リスクが低いように見えても実際には支援が必要な場合もある。単にデータとして確認できるだけではなく、今後、支援の必要性を判定するための明確な基準を決定する必要があると思う。

【データ項目について】

- 警察が保有しているデータも連携の対象になるのか。虐待などを把握したときに、親の犯罪歴や子どもの補導歴が把握できれば、より解像度が高まると思った。

- 実習でケースファイルを閲覧していたが、被虐待児の父母に年齢差があることが多いと感じた。ただし年齢差があることのみで虐待の可能性が高いとは判断できないので、こどもの養育環境と関連が深そうなデータ（世帯収入や公共料金の支払状況など）と掛け合わせることができれば、アウトリーチ型の支援につながりやすいと思った。

【支援を届けるための工夫について】

- 一番尊重すべきなのは支援を受ける人や当事者の方たちであり、その人たちの気持ちに最大限寄り添わないといけない。その人たちから「支援はいらない」と言われたら、見守りの体制は継続しつつも強引に支援を実施すべきではないかもしれない。
- 一般的にプッシュ型・アウトリーチ型支援としてケースに介入するときは、「できていないこと」にフォーカスすると思うが、「できていること」を伝えてあげることで、「これは認めてくれるんだ」と感じて支援を受け入れられやすくなると思う。
- データの閲覧主体にこどもや家庭も加えて良いと思う。障害児のいる家庭では「親が死んだらどうなるのか」といった不安を抱えていることもあると思う。例えば、親がその障害児が成人した後の生活情報を自発的に確認できる環境にすることで、親の不安が少しでも解消できるかもしれない。
- こどもと関わる人が必要なタイミングでそのこどもの情報を知ることができることが重要だと思う。一つの大きなデータベースに名前を入れて検索すると、教育や医療、福祉などの分野で行政と関わった履歴が網羅的に確認できる状態となるのがこどもデータ連携の究極の理想形だと思う。

2. 実際に困難な状況に陥った際に、自分なら誰（どこ）に助けを求めますか？ 選択肢として誰（どこ）が浮かびますか？

- 自分は家族に相談すると思う。もし家族が自分の拠り所にならない場合は、友達や学校の先生に助けを求めるかもしれない。信頼関係が強い人から順番（家族、友達、学校の先生）に助けを求めたいと思う。
- 信頼関係があり、「この人なら助けてくれそう」と思える人、学校の先生かバイト先の大人に助けを求めると思う。自分が高校を辞めるときは、身近な塾の先生に相談した。家族は自分の意見に反対するのが目に見えていたので、相談しづらかった。
- 心を許している親や友達などなら何でも話せる。学校の先生は、忙しくて時間を取ってくれなさそうなので、壁があると感じる。今は、相談先の選択肢の一つとして児童相談所などの機関があることを知っているが、こどもの場合はそのような機関についてあまり知らないため、相談してもよいのか悩むと思う。また、信頼関係のある相手だとしても、忙しそうにしていたら遠慮して他に頼れそうな人に相談すると思う。
- 最も身近な親が最も助けを求めることができる存在である。また、物理的な距離と心理的な距離は必ずしも一致しないと思う。例えば、半日くらい一緒に過ごしている学校の担任の先生に対して信頼感を持っていないことあれば、普段の関わりは多くないが自分によくしてくれる他のクラスの先生に信頼感を持つ場合もある。

【信頼関係を結ぶことができる人はどのような人か？】

- 話を聞いてくれることが大きい。「この人なら話を聞いてくれると思える」だけで、信頼関係が生まれていると思う。自分が話したことを受け止めて肯定してくれたり、自分のために思って意見を言ってくれたりすると信頼感を持てる。
- 話を聞いてくれることに加えて、自分がどうしようもないときに「この人に相談したら壁を乗り越えられるかもしれない」という尊敬する気持ちを持つことができれば、信頼感が生まれると思う。
- 自分を大切に思ってくれていることを実感した時に信頼関係が生まれると思う。自分のことをよく見て、良いところを伝えてくれると信頼するようになる。
- 話を聞いて受け止めてもらえるのは信頼関係を生むために重要な要素だと思う。さらに、お互いに与え合えるようになれば、信頼関係以上の深い関係につながると思う。個人的に、友達は究極の利害関係者だと思っている。お互いに心の安らぎや楽しい気持ちなどを与え合ったりできるから、友達や親友として一緒に過ごせるのだと思う。
- 自分がやってほしいことをしてくれたり、言わないでほしいことを言わないでいてくれたりすることも信頼関係を作るうえで重要だと思う。自分のために時間を作ってくると、自分もその人のために何かやってあげようと思える。

【信頼関係を結ぶことが困難な人はどのような人か？】

- 自分と性格が合うかどうかに加えて、周りの人の意見も大切にしている。周りの人が「あの人は表ではこうだけど裏ではこんなひどいことを言っているよ」と聞いて落胆することもある。自分の評価と他者の意見の両方を総合的に考慮して、信頼するかどうか判断したい。
- 性格が嫌いな先生や苦手な人。例えば、バイトを始めて間もなく、まだ仕事を覚えきれていない頃、忙しい時間にちゃんと働けなくて使えないと思われて、自分へのあたりが強くなった先輩がいた。表情や声色、態度などのあたりが強い人は苦手だと感じる。
- 相談すると長時間会話することになるので、話すペースが合わない人は話じづらい。自分が話したいと思っているタイミングですっと話してくる相手は話じづらいと感じる。逆に、自分があまり話したくないと思っている人にとっては、相手がたくさん話してくれたほうがありがたいと思う。
- 一方的に相手から意見を突き付けられたときは不快を感じる。こちらの立場を考えてくれない人は苦手を感じる。

3. 自分から助けを求められない、求めない場合に、周囲からどのように接してほしいと感じますか？

- 相手だけでなく環境も大事だと思う。児童自立支援施設に実習に行ったとき、ある児童は個室に二人きりだと緊張した様子だったが、ご飯を食べたり運動したりしているときに、児童が「こういうことがあったんだ」とネガティブな経験を話してくれた。かしまった環境だとお互いに緊張してしまうかもしれないので、何かをしながらだより話しやすいと思う。

- 会議室だと話しにくいかもしれない。また、話を聞いてくれる人がスーツを着ていると、かしこまった感じになってしまう。
 - 私服の方が話しやすい。
- 助けを求められないときは多少強引にでも助けてほしい。助けを求められない場合、他者に助けを求められないよう誰かから抑圧されている可能性がある。また、自分から助けを求めないときにはそっとしておいてほしいが、助けを求めたときにすぐに応じてくれる環境があれば安心する。
- 助けを求められない／求めないときは、周りのほうから察して自分にコンタクトを取ってほしい。例えば、一緒に歩きながら自然に「最近嫌なことあった？」と聞いてくれると嬉しい。
- 助けを求められないときは、表情の違いや声のトーン、動作などふだんと違う様子から察してほしい。さりげなく「どうしたの？これ手伝うよ」と声をかけてくれると嬉しい。助けを求めないときは、そっとしておいてほしいが、見守ってくれていて、いざ自分が助けを求めたときに応じてもらえるような相手が良い。

【助けてほしいときにサインを出すか】

- サインを出すかもしれない。個人的には、自分の弱みを見せて助けを求めることに抵抗感がないので、「助けて」と言えると思う。ただ、自分が助けてもらうことで、ほかの誰かが傷ついたり助けを求めなければならない状況になりそうになったりするときは、助けを求めることを控えると思う。年齢が近い相手の方が助けを求めやすい。
- 自分は結構一人で抱え込んで、助けを求めずに頑張ることが多いが、バイトで困っているときに目線を送ってサインを出すことはある。
- 自分は普段から何でも話すほうだと思う。もし、自分が困っている場合は、困っていることを解決する力がある人に相談すると思う。例えば、もし親の介護について困っていたら、介護の支援を専門にしている身近な人に相談するイメージ。
- 嫌なことがあったときに一人で思いを抱え込み切れなくなったら、信頼できる人に話して、自分の心を落ち着かせる。

以上

3班（大学生世代3名）

1. お住まいの自治体が既に保有するデータを活用して、こままっているこどもや家庭を早期に把握して、プッシュ型・アウトリーチ型の支援を届ける「こどもデータ連携」の取組について、率直にどんな感想を持ちましたか？

- 色々なところがばらばらに色々な情報を持っているので、情報が集約されたら確かに良いだろうと思う。情報を1つにまとめると、全体像が見えやすくなるだろうと思った。
- 虐待などの困難を抱えた子を見つけるのは、事後的になってしまうことが多い。こちらから潜在的な虐待を発見できるようになれば、虐待件数が減ると思う。ただ、運用までにはまだ時間がかかるように思った。
- ゼミの先生から、今日のいけんひろばで「こんな種類のデータがあれば良いのでは」という意見を発表してほしいと言われた。こども家庭庁さんがすでに色々なデータ項目を考えているだろうから、新しいアイデアを出すのは難しいなと感じた。
- こどもだけでなく、保護者の養育歴が分かると良いのではないか。貧困や虐待は連鎖する。
- こども自身がSOSを発信するのは難しいだろうと感じる。生まれた家庭環境に差があるように思うので、やはり保護者についての情報があると良いだろうと考える。例えば離婚歴など。
- 結婚している場合より、内縁の夫がいる場合にリスクが高まるように思う。ただ、内縁の夫のデータは把握するのが難しい。
- 住民票のデータで家族構成について把握できると良いのでは。
- 両親が何時から何時までどのように働いているか、家にどのくらいいるかなどを把握できると良さそうである。
- 私の母は看護師で、夜勤をしていた。父は単身赴任だった。そのため祖母の家に預けられていた。そのデータだけ見ると「虐待されていそう」と判断されてしまうかもと思った。もし疑われたら「なんで？私って困っているのかな？他の子と違うのかな？」と感じるだろう。
- 親が、助けを借りながら子育てできるようなサポートが必要だと思う。

2. 実際に困難な状況に陥った際に、自分なら誰（どこ）に助けを求めますか？選択肢として誰（どこ）が浮かびますか？

- 自分は親に言うと思う。自分が小学生のとき、友達と喧嘩して無視されることがあっても、基本的には1人で抱えていた。周りに相談することはあまりなかった。「学校に行きたくない」と言ったら親に「なぜ」「行け」と言われた。もしお家の人が怖い場合は、どこにも言えないと思う。学校の先生とかが「どうしたの」など聞いてくれればぼろっと言うかもしれない。自分からは言えない。学校の先生と仲良くなろうと思ったことがあまりない。どちらかというと、妹のほうがよく話す。
- 私は学校の先生や保健師さんに相談していた。小学生、中学生、高校生の時は体調が安定せず、保健室登校のようになっていることもあった。

- 助けを求める先は親だが、言える悩みと言えない悩みがある。親に言えない悩みは保健室の先生に話すが、以前保健室の先生に他の先生の愚痴を言ったら他の先生にまで伝わってしまったことがあった。その時はたまたま伝わっても良い内容ではあったが、人によっては情報が洩れるのが嫌だと思いかもしれない。その意味で、連携には難しさがあると思う。
- SNS に悩みや SOS を書き込む人もいるかも。
- SNS だと、助けを求めるというよりただ吐き出したいという気持ちがありそう。
- 安心できる場所は家の布団である。
- 私も家が安心できる。
- 今は一人暮らししているため家が安心できる場所だが、実家に住んでいた時はそうではなかったかもしれない。塾の先生が優しくかったので、塾が安心できる場所だった。
- 「ここでなら何をしても良い」と思える場所が安心できる場所になる。
- 両親が共働きだったため祖父母の家に預けられる時間もあったが、祖父母に悩み相談はしなかった。
- 友達には恋愛相談をするが、家の困っていることについて相談することはなかった。
- 学校の友達のグループから外されたときは、負けたくない気持ちが強かった。意地でも謝らないぞと思っていた。他の友達が私を心配して「謝ったほうがいいんじゃない」と言っていた。
- 社会人になって困りごとができた場合、「もし相談をして給与や昇進などの待遇が悪くなったら」と思うと心配に感じ、会社の人には相談ができなさそうと思った。
- 相手に辛いことを打ち明けられたら、自分も打ち明けられるかもしれない。
- 学校の中に助けを求められる窓口があったら相談しやすい。
- よく通っている場所だったら相談しやすいが、窓口で相談するためだけにその場所に行こうとは思わない気がする。
- 学童の先生には相談しようと思わない。あまり先生と遊んでいる人がいなかった。こどもはこどもだけで遊びたいと思っていた。
- 習い事の先生がおばちゃんとかだったら相談しやすいかもしれない。ただ、皆の先生だから、あまり個人で話すという感じではない。
- 私も学校と家以外だと習い事が思い浮かぶが、習い事の先生に相談はしないかもしれない。
- 同級生で不登校になった子がいたときに、親伝いで「あの家の親はあまりちゃんと育てていないらしいよ」という噂が伝わってきたことはあった。
- 小学校のときに仲良かった子に母子家庭の子がいた。市営住宅のようなところに住んでいた。自分はその子と普通に遊んでおり、何の違和感もなかったが、親から「あの辺に住んでいる子はこういう環境なんだよ」言われたことがある。
- 先生や大人に言えないことも、ぬいぐるみなどには言えるかもしれない。中に人間はいるけど、見た目としてはぬいぐるみやバーチャル YouTuber などであれば話しやすい人もいるかも。
- 学校の先生は、虐待や貧困やヤングケアラーについての知見があまりなさそう。そういった困りごとと無縁な人が先生になるようなイメージがある。

3. 自分から助けを求められない、求めない場合に、周囲からどのように接してほしいと感じますか？

- 周りが気づいてくれたら打ち明けられそう。
- 皆がいる前で、「あとで話そう」などと先生に言われたら困る。悩みがあると悟られたくないし、皆に聞かれないうようにしてほしい。個別の場で先生から声をかけられたら話せそう。
- 痣があったり、身なりが汚かったりすれば周りの人も SOS に気づくかもしれない。
- もし痣があったとしても、その子が「転んだ」と言えばそれを信じるだろうなと思う。こどもは、自分が親に殴られたことがなかったら、親が自分の子を殴るということを想像できないように思う。
- 助けを求める方法について、読み物よりは動画などで紹介するのが良いかなと思った。
- 虐待を受けているという前提で確認をしてくるのではなく、「他の子にも確認しているよ」という姿勢で心配されれば気にならない。
- 仮に予期せず妊娠した場合にどんな病院に行けば良いのかなど、一連の流れが分かると助かると思う。
- 自分自身で困難を認識できている人がそもそも少なそう。助けを求められるかどうか以前に、自分の困難に気づく場が必要だと考える。気づいていない状態では、学校に社会福祉士さんや心理的な専門性のある職員がいても、助けを求めにいかないだろうと思う。虐待といっても 365 日 24 時間殴られているわけではないだろうし、ヤングケアラーの場合は「親を助けたい」と思っているかもしれないので、気づきづらいうように思う。介入をされて初めて自分が置かれている状況の困難さを知る場合もあるだろう。
- もしも自分の好きなことが何でもできる部屋が学校にあって、たまに授業の代わりにその部屋で過ごせる時間があると良いだろうと思う。その時間が楽しいから他の時間も頑張れると思うかもしれない。
- バウムテストのような心理テスト的なものをこどもに受けてもらい、心理状態を確認できると良いだろうと思う。学校で学期ごとに実施すれば変化も見られる。

参加者アンケートで貰った意見

- データ連携とは内容が少し離れるため言わなかったが、実習を通して、児童相談所の記録が児童相談所ごとに異なっていることは問題だと考えるようになった。ケース移管しやすくするために、全国でシステムを一本化する動きがあるのなら、進めていって欲しいと思っている。

以上

2. 11/6 開催回

1 班（大学生世代 5 名）

1. お住まいの自治体が既に保有するデータを活用して、こままっている子どもや家庭を早期に把握して、プッシュ型・アウトリーチ型の支援を届ける「こどもデータ連携」の取組について、率直にどんな感想を持ちましたか？

- 行政は縦割りで、制度の狭間にいる人を救えないとよく言われるが、データを活用することでより救うことができるようになる。一方で、個人情報保護法に基づいて適切に管理されると思うが、自分の知らないところでどのようにデータを使用されているのかは不安である。
- イメージが湧いてないというのが率直な感想。今年の夏に行った児童相談所の実習では、アクセス制限をしたうえで、福祉部局のデータが市役所内の複数部署内で共有・活用されていた。このようなデータ連携の取組が全国に広がるのは良いと思った。
- 小学生の頃、「特別支援学級に通っている子に対してどう思うか。」というテーマで作文を書かされた。先生には「○○ちゃんはやさしいこともあるけど笑顔が素敵な子」というような内容で書くように誘導されていた記憶がある。また、ある先生はクラスメイトの前で、あるひとり親家庭の子のことを「○○君の家庭は大変だけど頑張っている」と発言していた。福祉について勉強した今では、おかしいことだったと感じる。これらの経験から、福祉に関して専門的な知識がない人間が、福祉に関する情報を保有することを不安に感じる。実際、教職課程では福祉分野についてあまり学習しないため、学校で福祉的なデータを取り扱う場合は、データを取り扱える範囲を福祉に関して専門性が高い人間に限定してほしい。
- わざわざ調査しなくとも、学校での様子を見てると子どもたちの生活状況がある程度推測できる部分もある。例えば、ある子どもが貧困家庭であることを他の子どもたちは何となくわかっているケースがある。どこまでが個人情報に該当するのかという線引きが難しい。
- 具体的に何が共有されるのかはまいちわかっていない。
- 実証事業の採択団体である大阪府和泉市では、スクールソーシャルワーカーと福祉部局の間で情報が共有されるとのことだったが、どこまで情報を共有して良いのかという判断が難しい。
- あくまでも想像だが、小学校に入学するタイミングで、各家庭の生活保護の受給状況や乳幼児検診の結果などの情報が事前に伝わると先生たちが先入観を持つ可能性があり、一長一短かと思う。
- 子ども自身が声をあげられない理由や背景を追求したほうが良い。たとえば、ヤングケアラーは「家事という役割を果たしているから家の中に居場所がある」と感じているため、あえて声をあげないという話を聞いた。

【声をあげられるタイプだったか】

- 家庭に関する問題の場合、それが当たり前と置いていたためそもそも気が付かない。自分の家庭がどれくらい大変なのかが分からない。いじめの場合、自分の親は話を聞いてくれるタイプであったため伝えることができた。
- 宗教二世の問題の場合も、自分の家庭が特殊であることに気付くのはある程度成長してからと聞いたことがあるので、小学生が気づくのは難しいかもしれない。
- 小・中学生時代を振り返ると、とても狭い社会で生活していたと感じる。学校で家庭のことを話すと終わってしまうような気がしたため、自分は声をあげられていなかった。
- 家での自分や学校での自分、家や学校以外での自分はそれぞれ違う。そのため、ほかのコミュニティーで起こったことをわざわざ伝えることはしなかった。家がしんどいことを学校の友達が知らないからこそ生きていけるという側面がある。学校での自分を守りたいからあえて伝えていなかった。
 - 関連して、学区内の子ども食堂には行かない人がいると聞いたことがある。
- 部活がしんどかった中学 2 年生の頃、スクールカウンセラーの案内をもらった。中学 1 年生の時の担任の先生にスクールカウンセラーにつないでもらうようお願いしたところ、「スクールカウンセラーに相談する前に部活の顧問に相談したか」と止められて絶望した。また、高校 3 年生の頃、スクールカウンセラーにスクールソーシャルワーカーの話を知ったために学校の先生につないでもらったが、スクールカウンセラーに行っていることが先生の間で共有されていた。守秘義務が守られていないことに違和感を覚えた。少なくとも、先生同士で共有されていることを相談者自身に知られてはいけないと思う。

【早期把握してプッシュ型・アウトリーチ型支援をすることによどのような効果があると思うか。】

- 支援するときのアプローチが難しいと感じる。大阪市の貧困調査に関する会議を傍聴したとき、保護者から「どうして困窮していることがわかったのか」と尋ねられたようだった。スムーズに支援ができるのであれば、自ら声をあげられず制度の狭間にいる人へ支援が届けられるので良いと思う。
- 取組自体は良いと思う。ただし、妊婦健診・乳幼児健診の未受診者や生活保護の受給世帯は、もはや「潜在的に」ではなく明らかに支援が必要な世帯だと思う。本当に「潜在的」なのは、「いつも頭にフケがでている」「いつも髪がべたついている」「いつも同じ靴下を履いている」などの程度の異変がある世帯だと思う。正直、「テーマ説明資料」に例示されていることは、「早期発見」ではないと思う。
- 小学校の先生が生徒一人ひとりを詳しく見ることができていなかったと思う。そのため、気付いてほしい時に気付いてもらえない子どもたちが多。また、どこに相談したらよいか迷っている間にいつのまにか月日が経過してしまう場合もある。とはいえ、先生やスクールソーシャルワーカーの目線だからこそ察知できるような事柄も、データ項目として盛り込めたら良いと思う。
- 例えば、虐待通告が入って安全確認のために訪問するとき、事前情報がない状態で訪問するのはリスクがある。事前に世帯構成や制度の利用歴などの情報が把握できているほうが働く側としては便利だと思う。
- 実習先の社会福祉協議会でトラブルが起きたとき、職員の方が 5 か所くらいに電話をかけて情報収集していたが、担当者が常駐ではないため、半日以上経過することも多かった。分かりやすいデータとして共有されていたほうが、早く対応できるので良いと思う。

【困っている子どもや家庭について、どんな困りごとが早期把握できるとよいか。】

- 例えば、弟や妹が生まれて親が自分と話してくれる時間が短くなったことが把握できたら良いと思う。兄姉の面倒を見る時間がないということは、育児に追われて極限状態になっていることを意味すると思う。子どもの声を拾い上げることで、虐待の早期発見につながれば良いと思う。
- 「ご飯が食べられていない」や「お風呂に入れていない」、「友達関係がうまくいかない」などが思い浮かぶ。
- 子どもが悩んでいることは、些細なことの集合体であると思う。例えば、貧困家庭であること自体を困っているのではなく、「友達と遊びに行くときにお小遣いがもらえない」ことに困っている。抽象的なデータ項目では、子どもの気持ちには寄り添えない気がする。
- 資源や予算が異なる以上、自治体によっても対応が異なるのかもしれない。
- 「お母さんが朝起きてこなくなった」や「以前は朝ごはんを作ってくれていたのに、最近は菓子パンになった」くらいのレベルが早期発見に該当すると思う。それ以降は、実際に問題が起きてからの対応地という印象がある。
- 「学校の勉強が分からない」なども困りごとになると思う。
- 「テストで急に点数が大幅に下がった」なども早期発見にあたるかもしれない。
- 子どもの頃を振り返ると、周りに把握してほしいことがなかった。むしろ、把握されていたほうが困っていた気がするので、早期把握が必要なのかどうか分からない。
- 子どもは子どもなりに考えてうまいこと立ち回っている。もし困っているときにアウトリーチされていたら、うまくごまかしてやり過ごしていたかもしれない。
- 一家心中や虐待が看過されて亡くなってしまふほどの深刻な事態は、早期発見によって必ず救わないといけないが、国がどの程度の困りごとまで支援するべきなのか難しい。誰もしんどいことを抱えて生きている。朝ごはんが菓子パンでも、親が朝になっても起きてこなくても小学校の高学年くらいになれば生きていける。何を問題として取り上げるのかという線引きが難しいと感じた。

2. 実際に困難な状況に陥った際に、自分なら誰（どこ）に助けを求めますか？ 選択肢として誰（どこ）が浮かびますか？

- 家にも学校にもつながっていないサードプレイスだと安心できる。これまでの経験から学校の先生を信用していないため、学校とはつながっていてほしくない。児童相談所は一部のケースしか扱っていない。SNSでの相談窓口なども増えてきたが、顔を見て話せることが大事だと思う。また、悩みごとを初めて話すときはみじめな気持ちになるので、電話相談のように毎回話す相手が変わるのはしんどい。ただし、一般論でいうと、守秘義務がしっかりしているのであれば学校を含むみんなが行く場所にあったほうが良い。
- 誰か 1 人に話を聞いてもらいたい場合もあれば、色々な人に話を聞いてもらいたい場合もある。自分は、学校の先生に話すとややこしくなると知っていたので、きつず用の知恵袋に投稿して同じような世代の子どもから回答をもらっていた。本当に表示通りの年齢が返信をくれているのが怪しい部分もあるが、心の支えになっていた。たまに攻撃的な回答もあったが、Yahoo! きつずの規制が強く、参考になる意見も多かった。

- 経験上、大人に話せないことのほうが多かったので、友達に話すことが多かった。解決するわけではないが、似たような境遇の子からアドバイスしてもらえようが心理的に相談しやすかった。相談内容にもよるが、顔を合わせないからこそ話せることもあった。名前や顔を出さずに専門家と 24 時間チャットできるサービスにとっても助けられた。
- 自分の場合、しんどいと思った時に相談する気力がわかない。また、みんなが忙しいかもとなってしまう。そのため、身近にいつでも確実に話を聞いてもらえる人を確保しておく必要があると感じた。例えば、大学のカウンセラーなら業務時間はいつでも聞いてくれる。そういう人たちと予め仲良くしておき、一番しんどくなったときに、相談しやすい状況にしておくべきだと思っている。予防線を張っておくことが大切であると感じた。
- 信頼関係がある方が良い。
- 学童の先生はこどものことをよく見てくれていたので、相談しやすかった。学童以外の先生に直接相談することはなかなかなかった。
- 話を聞いてくれる人と、実際に支援をしてくれる人は別がよい。例えば、学校の先生の場合は忙しくさせてしまうと気を使ってしまう。
 - 個人的には、サービスや制度を紹介することが仕事の人と割り切っているのも、信頼関係を築いていない初対面の相手でも話することができる。悩みや思いを受け止めてくれる人とサービスを紹介してくれる人は別のほうが良いと思った。

【助けを求められる場所について】

- 助けを求められる選択肢が多いほうが良いかと思う。
- 人それぞれだと思う。助けを求められる選択肢が多すぎると、こどもはどこに相談したらよいのか分からなくなると思う。
- 自分が Yahoo! きっずの知恵袋を利用したきっかけは、小学校のパソコンの授業の自由時間だった。実際に投稿したのは家だった。
- 自分の家は厳しく、携帯端末を高校生まで持たせてもらえなかった。こどものときは家か学校しか居場所がなくて息苦しかった。

3. 自分から助けを求められない、求めない場合に、周囲からどのように接してほしいと感じますか？

- こどもはすぐ考えている。あえて言っていないことも多いし、大人の顔色を窺っているし、大人の会話もほとんど理解している。「話さない」のもその子の選択なので、特にしてほしいことはない。ただ、こどもの気持ちはよく変わるので、普段通りに接してくれつつ、いざ声をあげたらいつでも歓迎的な雰囲気であってほしい。「もし困っていたら助けてあげるよ」と言ってくるのも煩わしい。助けを求めたときに、自分の想像の 100 倍くらい施してくれる人だと嬉しい。
- 自分の家庭が大変だから特別に支援されているとこどもに思ってしまう。こども食堂のような、誰でも歓迎しているような雰囲気が良い。

- いじめの場合、まず子ども自身がいじめられていることに気付くことが大事だと思う。「下駄箱に〇〇を入られている」や「友達に無視されている」など例示とともに相談先が紹介されていたら良いと思う。さらに大人の貧困で例えると、「子どもを塾に通わせられない」「旅行に行けない」などをイメージしている。困りごとが具体的な出来事レベルで書かれていたほうが相談しやすい。
 - 例を具体的にしすぎると、その具体例に当てはまらないと助けを求められないと思うかもしれない。例えば、どの困りごとにも通ずる気持ち（例：もやもや）の程度で表現できると良いかもしれない。
- 誰でも歓迎するスタンスも大事だが、対象が広すぎるとかえって自分が対象だと思うことができなくなるかもしれない。「誰でも来てOK」と言われるのと「あなたも来てOK」と言われるのでは受ける印象が大きく異なる。そのため、自分が対象であることが明確にわかるような窓口があったほうが良い。子どもデータ連携の取組は、公的な機関が支援の実施主体であるため難しいかもしれないが、一度でも過去に受容された経験があると相談しやすくなる。
- 助けを求められないながらも心のどこかで気づいてほしいという思いもある。自分の知らないところで情報が共有されていることにそこまで抵抗感はないが、信頼関係が構築できている先生から声をかけてもらえるほうが良いかもしれない。
- 自分から助けを求めないときは、特に何かを解決したいとは思っておらず、そのまま日常を乗り切りたいと思っていることが多いため、普段通りが良い。ただし、話を聞いてほしい・受容してほしいという思いはある。変に分かったふりをしたりアドバイスしたりはせずに、ただ話を聞いてくれるだけで十分。
- 頑張っていることを褒めてほしい・受け止めてほしいという思いと、どうにもならないから助けてほしいという思いは異なるニーズなので、アウトリーチ型支援もそれぞれの役割を担う人がいてほしい。
- 信頼できないから助けを求められないのではなく、自分自身が助けを求められる状況でなかったり、漠然と相談したいと思えなかったりするときもある。相談しても理解してもらえないと諦めていることもあると思う。例えば、母親が嫌いということは、周りの人と考えが違いすぎて話した方がかえってしんどくなると思う。伝えてしまうことで、なんとなく友達と対等ではなくなるような感覚がある。
 - 仲が良い人だからこそ関係を壊したくないという気持ちから話せないこともある。
- 自分は、相談相手が自分の気持ちに引っ張られて暗い気持ちにならないかを重要視している。気持ちがゆらがない、差別的な発言をしないなど、専門的な知識を有しているスクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーが学校に駐在してほしい。その人たちと信頼関係を構築できていれば相談しやすい。
- スクールカウンセラーとスクールソーシャルワーカーの存在が見えづらい。学校のおたよりで少し案内がある程度で人となりも全く知らない。先生のように、スクールカウンセラーとスクールソーシャルワーカーの顔もみんなに知ってもらえれば、子どもたちは相談しやすくなると思う。
- 相談したいと思ったときはいつでも、スクールカウンセラーとスクールソーシャルワーカーにいてほしい。
- 専門的なスクールカウンセラーとスクールソーシャルワーカーであれば、先生へ共有する情報の範囲もしっかり守ってくれると思う。
- 悩みを相談したいと思ったときにスクールソーシャルワーカーが学校におらず、その時に相談できないと「もういいや」と思ってしまう。
- 「相談したい」という気持ちには波がある。

- こどもは自分なりに頑張っているのでむやみに支援すべきでないという考え方もあるが、こどもの最善の利益の観点からは、こどもが望んでいない場合でも支援していく必要があるのかもしれない。とはいえ、学校がこどもの最善の利益に資するデータを有しているのか疑問である。
- こどもの頃を思い返すと、自分が見えている世界が全てだったと思う。だからこそ、介入するには細心の注意を払わなければいけないと感じた。

以上

3. 12/6 開催回

1 班（高校生世代3名）

1. 「こどもデータ連携」の取組について、率直にどんな感想を持ちましたか？

- どのように個人情報保護していくのが不安である。家族と会話しているときに、「他の機関に自分たちの個人情報を共有されるのは怖い」という話をした。特に知られたくない情報を周りの人（例：先生など）に勝手に共有されたくない。知られたくないからこそ伝えていなかった情報を勝手に知られるのは、支援につなげるためとはいえ微妙な気持ちになる。情報を共有して良い範囲を自分で管理できずに知らないうちに誰かに伝わってしまうという点が怖い。とはいえ、個人情報保護に関する不安を補って余りあるメリットがある良い取組だと思う。ヤングケアラーなど、忙しさゆえに自分から相談に行くのが難しい人たちのためにアウトリーチ型の支援があると良いと思う。
- 良い取組だと思う。以前自分が不登校になったときは、自分自身でも原因がわからなかった。不登校の子が利用する施設に通っているような様々な事情を抱えた人たちに対する支援もあると良いと思う。
- 取組自体は良いと思う。ただし、他の関係機関に情報共有する際に本人同意を得るのが気になる。また、情報が共有される範囲が明確になっていると良いと思う。
- 個人情報の観点以外は本当に良い取組だと感じている。貧困やいじめなどそれぞれ性質が異なる問題に対してどのように対処していくのが気になった。
- 情報共有の際、虐待などの緊急性が高い場合は本人の同意は不要、それ以外の場合は本人の同意が必要という整理にできると良いかもしれない。
 - 不登校になっている人は、他人を信じることができなくなっていることが多いので、本人の同意があったほうが良い。
 - 虐待やヤングケアラーなど、本人が望んでそうなっているわけではない問題については、本人の同意取得を必須にしないほうが良いかもしれない。さらに、貧困の場合は、当事者が「知られたくない」という意識を持っている可能性があるため、本人の同意取得を必須にしないほうが良いかもしれない。緊急性の程度のみで一概に判断することは難しい。
 - いじめや不登校の場合は本人の同意の取得が必須だと思う。自分がいじめを経験したときは、学校外の人だったからこそ相談ができた。情報を共有する範囲は事前に本人に同意してもらったほうが良いと思う。仮に同意を取らない場合でも、情報を共有する範囲は事前に教えて欲しい。
 - いじめや不登校の場合は本人の同意を取得したほうが良いと感じている一方、当事者が相談先に関する知識を持っていないケースもあると思う。そのため、本人同意の取得を必須にすると、当事者が知っている関係機関への情報共有しか同意を得られず、アウトリーチ型の支援が十分実現しないおそれがある。

2. 実際に困ったときに、誰かに相談したいと思いますか？ 相談したいときは、誰（どこ）に声をかけますか？ 選択肢として誰（どこ）が浮かびますか？ 相談したくないと思うのは、どんなときですか？

- 相談したいかどうかは困っている内容や困るに至った経緯によるので、一概にどちらとはいえない。相談したいと思っても一人で抱え込んだこともあれば、相談できたこともある。基本的に、自分の心理状態に関わりそうなことは相談したくない。相談することになった場合でも、なるべく学校や家族に連絡されない場所が良い。また、困っていることに3人以上関係者がいる場合も相談したくない。一方で、人の気持ちが関わらないこと（勉強や物の使い方などに）については、その事柄についてよく知っている人（塾の先生など）に聞くことはできる。以前、スクールカウンセラーに相談したとき、自分に確認することなく勝手に担任の先生へ情報共有されたことがあったので、専門職の人に対して苦手意識がある。専門職だったら話せるというよりも、自分が信頼を置ける人であれば話すことができるという感覚。
- 大抵の困りごとは、自問自答した後にゲームをしたり、動画を見たりしているうちに忘れることができる。相談したい相手は悩んでいる内容によって変わる。恋愛に関する内容の場合は、親には絶対に相談することはない。友達にも相談しづらかった。ただ、誰かに聞いて欲しかったので、占い師に相談しようか考えたことはある。勉強については、先生に聞きづらいので自分とタイプが似ている友達や ChatGPT に質問する。ChatGPT は馬鹿だから質問しやすい。
- 困りごとがあったら、自分の中で答えを出すタイプなので誰かに相談することは少ないが、仲の良い姉には相談するかもしれない。重い問題（例：家庭や人間関係のこと）に関しては人に相談しづらい。また、自分が困りごとを打ち明けることで、行動を起こして現状を変えてしまいそうな人には相談しづらい。その点でいえば、赤の他人に相談するほうがまだ気楽である。以前、重要なことを人に相談したときに、自分の同意がないまま勝手に行動されて、自身の周囲の状況が大きく変わったことがある。結果的に今の自分につながっているため今では感謝しているが、当時は納得していなかった。今は成人していることもあり、どのように解決に向けて進めていくのかは自分で決めたいという想いがある。

3. 困ったときや相談したときに、周囲の人からされて嬉しかったこと、もしくは嫌だったことはありますか？

- 嬉しかったのは、学校で友達に抽象的な質問したときに、面白い回答をしてくれたこと。馬鹿げた回答が返ってきて悩みが吹き飛んだ。また、真剣に向き合ってくれるのも嬉しい。嫌だったことは、恋愛に関して相談したときに、すぐに告白するようけしかけてくること。頭では告白したほうが良いと分かっているけど、それができないから相談していることを理解してくれていないと感じる。
- 嬉しかったのは、相談する時に自分が話せるタイミングになるまで待ってくれること。嫌だったのは、自分は聴覚過敏なので、会話中にイヤホンをつけることがあるが、以前、「（話すときにイヤホンをしていることが）人としてどうなの」と言われたこと。
- 嫌だったことは、解決して欲しかったわけではないのに勝手に解決に向けて行動されたこと。嬉しかったのは、別室登校にてスクールカウンセラーと話したとき、変に重く受け止めることなく面白い話などをしてくれたこと。「解決して欲しいわけではなくただ相談したいだけ」という気持ちに寄り添ってくれたのが嬉しかった。相談内容に対してしっかりと受け答えをしてくれつつ、丁度よいところで距離感を保ってくれたのがありがたかった。

た。なぜあそこまで上手く対応してくれたのかは分からないが、自分と近いタイプの人であったこと、何度か会話していくにつれて関係性が構築できたことが要因だったかもしれない。

以上